

シノドスへの歩み みことばと共に 待降節第三主日C年

小西広志

2021年12月12日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2021年12月12日、待降節第三主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

お前の中におられる、お前のただ中におられる

今日の第一朗読は『ゼファニア書』から採られています。注目したいのは15節にある「イスラエルの王なる主はお前の中におられる」、17節の「お前の主なる神はお前のただ中におられ…」です。「お前の中におられる」も「お前のただ中におられ」も同じヘブライ語です（ベ・キルベーフ）。フランシスコ会訳ではどちらも「お前のただ中におられる」としています。「なにになにの中に」を表す前置詞「ベ」と「中、内部」を意味する「ケレヴ」から成り立つ前置詞句です。主なる神はあなたの中に、あなたのただ中におられるのですよというメッセージになります。あるいは、シノドスの教会の視点からは、神さまはわたしたちの中におられる、わたしたちの真ただ中におられるというメッセージで受け取ったらよいでしょう。だからこそ、「喜び叫べ、歓呼の声をあげよ、心の底から喜び踊れ」（14節参照）という神さまからの呼びかけが響くのです。

主において

この「主なる神はお前のただ中におられる」というメッセージが、第二朗読では冒頭の言葉と結びつきます。「主において常に喜びなさい」（フィリ4章4節）。これも第一朗読と同じように前置詞句です。前置詞の「エン」と主を表す「キューリオス」が組み合わされています。ギリシア語の前置詞「エン」は英語のinに近い意味あいがありますが、ここでは「結ばれて」という理解でよいでしょう。この箇所をフランシスコ会訳で見ると、「主に結ばれた者として、いつも喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」となっています。主イエス・キリストとところどころでも結ばれているからこそ、喜びがもたらされるのです。しかも、「喜びなさい」の時制は現在形ですから、主イエス・キリストに留まってずっと喜び続けなさいという意味になります。

待降節第三主日は喜びの主日と呼ばれます。ですから、第一朗読も第二朗読も「喜び」という表現が何度も登場します。しかし、大切なのは「主に結ばれて」喜ぶことです。いえ、主に結ばれなければ、「喜び」はないのです。

では、わたしたちはどうすればよいのですか

福音朗読に移りましょう。ヨハネの説教によって燃え上がった悔い改めへの思いを抱いた民衆、徴税人、兵士たちが、ヨハネに問いかけます。ファリサイ派の人々とは異なって断食とか祈りとか禁欲生活をヨハネは求めません。ヨハネの回答は簡単に言えば貧しい人や助けを必要としている人に愛を注げというものです。「分けてやれ」、「同じようにせよ」(11節)。「取り立てるな」(13節)。そして「ゆすり取ったり、だまし取ったりするな」、「満足せよ」(14節)。といった具合です。

徴税人をやめるとか、兵士をやめて清い生き方をせよとはヨハネは命じていないことに注目したいです。職業の善し悪しをヨハネは語っていません。神さまからの求めである愛を注ぐことを日常の生活で実践しろと命じているのです。

わたしたちは、回心というと大きな変化が生じるのだらうと考えがちです。そうではなくて、まさに神のただ中であって、起きるごくごく小さな、それでいて他人に開かれている新しい生き方への第一歩が回心なのです。

メシアを待ち望んで

15節に「民衆はメシアを待ち望んでいて」とあります。「待ち望む」はギリシア語でプロスコオーですが、「希望と不安の緊張の中で待ち望む」というニュアンスがあります。原文をよく見ると「メシア」という語は省かれています。日本語訳では「メシア」を補って訳しました。あえて「メシア」と書かずとも「待ち望む」という表現で、民衆が希望と不安の中で救いを待ちわびていたことが表されています。

最初の10-14節で展開したヨハネの要求は、確かにファリサイ派の人々から見るとたわいもないものでした。しかし、日々の生活に窮する群衆にとって、支配者であるローマ帝国の手先となり裏切り者と罵られバカにされている徴税人にとって、さらには安い給料で働かされている兵士にとって、ヨハネの指示した要求は大切なものであることは理解できたでしょう。しかし、それを完全に実行することに困難さを感じていたのではないのでしょうか。それほど、人は弱く、惨めなのです。それで15節で「メシア」を通じての神さまからの助け、介入による救いを願っていたのだとも考えられます。神さまによる介入がなければ、ヨハネの指示を民衆は果たすことができなかったのです。

まとめ

第一朗読にある「ただ中にある」と第二朗読にある「主において」を心に留めたいです。現実の真ただ中に神はおられます。わたしのただ中に神はおられるのです。それは、パウロの表現を使えば「主に結ばれて」ということです。ヨハネが要求したのは非日常的な行為ではありませんでした。まさに社会のただ中であって、隣人への愛に生きなさいとの要求でした。農夫が箕を揺さぶって風を起こして選り分けるように、イエスさまは日常の生活の中で霊の風をわずかに巻き起こしてわたしたちを選り分けるのです。そうしますと、どれほど日常の生活の一コマ一コマが大切かが分かります。

信仰の共同体が活性化していくことを目指すと、教会でのミサや集いが非日常の出来事になります。つまり、毎週、教会でお祭りをしているような感じです。特に外国籍の信徒の方が多いと小教区共同体は活気を取り戻します。それはそれでいいのですが、生活のただ中におられる神、主に結ばれて生きる毎日、そして、

普段の生活にある神さまの働きといったものをともすると忘れてしまいがちではないでしょうか。シノドスの教会にある信仰の共同体は、落ち着きと喜びを兼ね備えた共同体ではないかなと思います。

それでは、また来週。